二〇二四年度　樟蔭高等学校　入学試験　問題用紙　【国語】

二〇二四年二月十日　実施　　解答は解答用紙の所定の欄に記入すること。　　〔六枚のうち　その一〕

一、次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

死ぬまで勉強と言うけれども人間は一体いつまで、何歳まで成長できるのかしら。もしかしたら五十とかになったら成長できなくなるのかしら。でも私は大丈夫。Ｉだって私はまだ三十二、まだまだ成長できるはず。でもどうしたんだろう。なんだか暗いな。そんなことを考えながら掃除機を使っていた但馬瑠佳は廊下を掃除しおえ、居間に入ったところで、「あっ」と小さく声をあげて、掃除機をその場に置き、リビングルームを突っ切って開け放った掃き出し窓からテラスに出た。

リビングルームに接続する、南向きの広いテラスには、朝から快晴であったのを幸いに一気に洗濯した一週間分の衣類やシーツが干してあった。

それらが沛然（はいぜん）として降る雨に濡れていた。

瑠佳は、なんで気がつかなかったのかしら。そうだ、掃除機だ。掃除機の音で雨の音が聞こえなかったのだわ。と思い、そう思った瞬間、なにもかもが面倒になり、いっそこのまま放置してもう一度洗い直そうか、とも思ったが、降り出してからあまり間がないらしく、触れてみると表面に水滴が付いている程度で、ⓐキジそのものが水を含んでいるようでもなかったので、思い直して洗濯物を取り込み始めた。

濡らしたくない順に急いで取り込んで、最後に二枚のシーツが残った。

リビングルームからこれを見て、さすがにあれはもう一回、洗わないと駄目かな。都会の雨にはどれほどの塵芥（じんかい）が含まれているのかしら、など考えつつ、ベランダに出てこれを取り込み始めた瑠佳の手が止まった。

手すりの向こう、建物の南を走る片側一車線の道路の歩道を右に曲がって建物の敷地に入ってくる夫の邦彦の姿を認めたからである。十一階のテラスから地上を見下ろす瑠佳は邦彦に気がついたが地上の邦彦は当然、瑠佳に見られていることに気がつかない。瑠佳はこれをよいことにしばらく邦彦が歩く様子を眺めていた。

傘を持たない邦彦は、道路から建物の正面入り口までの約二十メートルの通路を、腹のあたりに抱えた荷物を雨から庇（かば）うようにやや前屈みになって歩いていた。

その邦彦のすぐ脇を縦縞（たてじま）の制服を着た宅配業の青年が駆け抜けていった。瑠佳がその方を見ると道路にトラックが停まっていた。青年の背はほとんど濡れていないように見えた。①邦彦はずぶ濡れに濡れていた。

瑠佳はまるでフグのように頬をふくらませ、それからシーツを取り込んでリビングに戻った。その瑠佳の背も少し濡れていた。

《　中略　》

邦彦は、絶対に走らないこと、を条件に瑠佳と結婚した。瑠佳は、なぜ走ってはならないのか、その理由を言わなかった。ただ、「走らないで欲しいの」とだけ言った。そして瑠佳はその理由を尋ねるのであれば結婚しないと言った。「詮索（せんさく）はいや」とも。

そこでどうしても瑠佳を妻にしたかった邦彦は理由を尋ねないまま瑠佳と結婚した。

愛する人が、走らないでくれ、と言っているのだから走らない。それが邦彦の選択だった。かつて邦彦は、友人がその妻に、家で音楽を聴くな、と言われている、とこぼすのを聞いたことがあった。その友人はデスメタルの愛好家で部屋に遊びにいくといつもデスメタルがかかっていたが、そのなによりも好きなデスメタルを妻に禁じられ、聴くことができなくなったのだ。にもかかわらず友人は結婚して幸福に見えた。その他にも、結婚を機に愛蔵のコレクションを大幅に減らすことを命じられたビニル人形蒐集（しゅうしゅう）家の友人がいたし、スポーツカーをワンボックスカーに買い換えた知人もいた。

邦彦は、それに比べれば走らないことなんてなんということはない、と思った。

Ⅱ例えば、ここ数ヵ月で絶対に走らなければならない状況があっただろうか。いやそんなものはなかった。せいぜいいま走ればこの青信号で交差点を渡れる、とか、いま来た電車に乗れる、とか、ＡＴＭの手数料が安い、とか。そんな程度のことだ。

それに自分は元々、活動的な性格ではなく、中学生の頃から運動部に所属したことは一度もなかったし、八百メートル走などで女子によいところを見せようとして張り切っている同級生を冷笑的な眼差しで見ていたくらいで、自分のなかに走りたいなどという気持ちはさらさらない。

つまり、意味なく走れ、なにがなんでも走れ、と言われたら、ことによったら無理かも知れないが、走るな、というのであればこれを守るのは簡単だ。

②これはなににによらずそうだ。急に、手打ちうどんを作れ。作らないと結婚しない、と言われてもこれは無理だ。それには知識や経験、技術。そしてまた、道具や材料、さらにはそのためのスペースやらなにかも必要だからだ。けれども、作るな、というのなら簡単

二〇二四年度　樟蔭高等学校　入学試験　問題用紙　【国語】

二〇二四年二月十日　実施　　解答は解答用紙の所定の欄に記入すること。　〔六枚のうち　その二〕

だ。だって作らなきゃ、それで済むのだから。

そのように邦彦は考え、瑠佳と結婚して八ヵ月が経っていた。その間、邦彦は瑠佳がいるいないにかかわらず一度も走らなかった。

寝室で着替えてリビングに戻ってきた邦彦はソファーに腰を下ろした。邦彦はテーブルの上に置いてあったリモートコントローラーを操作してテレビの電源を入れた。瑠佳が盆に載せたポットとカップを運んできた。

テレビでは喜劇の舞台中継が放映されていた。結婚を反対されている男女の物語らしかった。もの悲しげな年齢のわからない男と美しい若い女が、いかにも金を持っているらしい老年の夫婦に土下座をしていた。茶を入れながら瑠佳は言った。

「これ、物禿真ノ進よねぇ」

「あ、そうなの。僕、知らない」

「え、知らないの。超有名よ。こないだ堀風香美と結婚してムチャクチャ話題になったじゃない」

と、そう言われても見当もつかない邦彦が、「へえ、そうなんだ」と言ったとき、白刃を振りかざし、女性を人質にとるなどして乱暴狼藉を働いていた悪人が物禿真ノ進に追い詰められ、画面の右側、舞台袖に逃走した。舞台中央あたりにいて、これを見た制服の警官は、「待てー」と叫びながら悪人が逃げた方角に向かってゆっくりと歩いて、やがて袖に消えた。物禿真ノ進が、「走らへんのかいっ」と言って、舞台上にいた大勢の人が転倒し、観客がどっと笑った。

物禿を知らない邦彦も思わず、タハハ、と笑い、③それから急に難しい顔をして茶を飲んだ。隣に座って熱心に見ながら瑠佳は少しも笑わなかった。

《　中略　》

そもそも瑠佳はなぜ結婚するにあたって邦彦に走ることを禁じたのか。というと少し違うのは、邦彦という人がまずあって、その邦彦に、走らない、という条件をつけたのではなく、走らない人、という前提条件にたまたま合致したのが邦彦であったに過ぎないからで、瑠佳からすれば走りさえしなければ猿彦でも彦六でもなんでもよく、④というか彦である必要すらなかった。

なので正確に言うと、瑠佳は走らない人なら誰でもよかった、ということになる。なぜか。それは瑠佳の些か病的な心理に由来していた。病的と言って、病と言わぬのは瑠佳がそのことを明瞭に意識し明確に理解しているからである。

そしてそのこととはなにかというと瑠佳のいわば妄念・obsessionで、かつて瑠佳は陸上競技の選手であった恋人に手ひどい扱いを受けたことがあった。どのように手ひどかったかは詳述を避けるが、ひとつだけ言うと瑠佳は比喩ではなく実際に雨の舗道に捨てられた。そのとき、瑠佳を捨てた男は車で走り去ったのだが瑠佳の目には競技用のパンツと巨大なゼッケンが誇らしげにヒラヒラ揺れながら遠ざかっていくように見えた。

爾来、瑠佳の内部で陸上競技はⓑキチクの所業となった。もちろん陸上競技が悪いのではなく、その男が悪いのだが、そう思い込んでしまうのが妄念なのである。そして陸上競技を憎む気持ちは時とともに走ることそのものを罪悪・罪業、という風に純化し、瑠佳の頭のなかに独特のねじ曲がった理論が構築されていった。

そもそも人間はなぜ走るようになったのかというと、人間が狩りをして暮らしていた時代、なるべく多くの獲物をゲットするためだ。それがいまでも大して変わらないのは、例えば福袋が売り出された際、人々が百貨店のフロアーを走る様を映したニュース映像などに明らかで、つまりは、人に先んじて福を得たい、のだ。この様子が浅ましいのは言うまでもない。スポーツなんて偉そうなことを言っているが、突き詰めればこれだって同じことで結局は、一位になりたい、のだ。そして一位になったその先には、大会の規模にもよるがカネや名誉が必ず付いてくる。私はそんな人とは絶対に結婚したくない。それどころか同じ空気を吸うのも嫌。でも私に言い寄ってくる人はみな走って一位になりたい、というあさましい人ばかりだ。というか私の美貌を一位になった自分への賞品と思っている節さえある。ふざけるな。その段、邦彦さんは鈍くさかった。いろんな意味で。一位はおろか、四位もあやしい、つねに予選落ちのような感じの人だ。だからこそ信頼できるのだ。Ⅲいや、でないと信頼できない。私は。私の場合は。

と、瑠佳はそんなねじ曲がった理論を構築したのだった。

だからといって瑠佳が不幸だったかというとそんなことはなかった。邦彦は瑠佳が自分の許に来てくれたのを喜び、瑠佳を心の底から愛し大事にして瑠佳は精神的に満たされていたし、また、身体的には鈍くさく、外見もパッとしなかったが収入は標準よりかなり高く、物質面においても瑠佳は豊かであった。

しかし⑤その動機がそうした異常な心理に基づくものである以上、ただそれは、邦彦が走らない、という一点によってのみ均衡を保つ危うい幸福であることは間違いがなかった。

二〇二四年度　樟蔭高等学校　入学試験　問題用紙

二〇二四年二月十日　実施　　解答は解答用紙の所定の欄に記入すること。

【国語】

〔六枚のうち　その三〕

例えば、瑠佳がなぜそのことにこだわるのか、と自ら考えてしまえば忽ちにしてこの均衡は崩れる。なぜなら、拘泥するということは、その、自分を手ひどく捨てた男のことを自分のなかで完全に処理し切れていない、簡単に言えば、【　⑥　】、ということが明らかになってしまうからである。

ただ、瑠佳は自分ではそれは絶対にない、と思っていたし、事実、その男がどんな顔だったかも覚えていなかった。瑠佳は自分のなかにあるのは、人間が走ることへの純粋な厭悪、ただそれだけ、と固く信じていた。

そのことを邦彦は瑠佳本人よりも深く理解していた。

邦彦は瑠佳のつらい過去の体験を結婚して三ヵ月後に知った。というより知ってしまったといった方がよい。美しい妻を得て幸福な邦彦に、聞きもしないのに、妻のかつてのブログや短文投稿サイト、登録していた交流サイトなどのアドレスをわざわざ教えてくれる⑦「親切な」友人がいたのだ。

けれども邦彦はさして苦しまなかった。過去がなんだというのだ。歳をとって先がなくなれば過去について考え、追憶に生きるしかないのかも知れないが自分はまだ若く、これまでよりもこれからの方が長い。先のことを考えないでどうするのだ。もちろん、いまこの瞬間、瑠佳のなかにその男への思いが爪の先くらいでも残っていれば関係が壊れることもある。しかし、邦彦にはそれはないように思えた。

と考えることによって邦彦は苦しまなかったが、自分が走らないこと、が前提になっているという奇妙な関係についてはひっかかるものがあった。しかし瑠佳を深く愛し、これを絶対に失いたくない邦彦は次のように考えることとした。

走らないことが前提になっている関係は確かに奇妙だし、そんなことを言う瑠佳は病的だ。一度、医師に診て貰った方がよいのかも知れない。けれどもなくて七癖あって四十八癖というようにその程度の癖であれば誰だって持っている。でもみんな普通に暮らしている。一病息災という考え方もある。そしてまた、走りさえしなければ、という前提だが、これはまあいわば個人的なジンクスのようなもの、もっと言うと断ち物のようなもので、人間はこうしたものを漠然と、感覚的に信じている。極端な話がどんなに明晰で鋭敏な知性を持ち、論理的な思考をする人であっても寺に詣で神社に参る。つまり、瑠佳と二人で幸福な一生を送るために走らない、というのはそんなに妙なことではない。それそのものを実行している人は少ないが、多くの人が心のなかにそうしたものを持っている。元日に多くの人が神社に参って平和な年であるように神に祈るが、⑧私が走らないのはそれと同じで、祈り、だ。私は祈りとして走らないのだ。ぜんたい祈りを馬鹿にできる人がこの世にいるだろうか。いるわけがない。

このように考えて邦彦は苦しみと疑念と不便を乗り越えていた。

しかしそれでも残る漠然とした不安はあった。なにかと忙しい毎日で、それが邦彦の頭に明確な像を結ぶことはなかったが、例えば、あの喜劇のように、悪人に瑠佳が連れ去られそうになったとき自分はどうすればよいのか。普通なら走って追いかけ瑠佳を取り戻すだろう。でも私は走れない。そんなことをしたなら冥顕の罰があたって、瑠佳は自分から離れていく。じゃあどうするのか。「待てー」と声を振り絞って叫び、歩いて追いかけるのか。やはり、あの喜劇のように。或いは、火事や地震が起こったときはどうするのだ。

Ⅳそんな、どす黒い運河のような悲しみと不安が邦彦の心の奥底に横たわっていたのもまた事実であった。

どんな人もそんな不安を抱えながら日々を生きている。そしてその日々が過ぎていく。

一週間が過ぎたとき、ついにそのとき、すなわち瑠佳と邦彦の心の底に蟠っていた不安が日常に立ち上がる瞬間が訪れた。

その日の午後、邦彦と瑠佳は犬を連れて部屋を出た。犬に適度の運動をさせると同時にⓒ件の洋菓子店に立ち寄ろうということになったのである。そしてそのとき邦彦は少々、慌てていた。というのは始めてしまった洗濯がなかなか終わらなかったり、いざ出ようとしたその瞬間に、瑠佳に電話がかかってきたり、マンションのエントランスまで降りた時点で財布を忘れてきたことに気がつくなどして、マンション前の歩道にようやっと出たときには二時を大きく過ぎてしまっていたのである。

邦彦は懊悩した。こんなことをしていたらロールケーキが売り切れてしまう。そうならないために早く出ようと思ったのだが遅くなってしまった。まア、走れば間に合うのだろうが。いっそのこと走るか？　いや、私は競歩と競走の違いを知らない。自分では競歩のつもりが妻から見れば完全に走っている、ということにならないとは限らず、それはあまりにもリスクが大きすぎる。ならば。いまできることを最大限やるしかない。すなわちできる範囲で急ぐ、ということだ。と、邦彦がそう思ったとき、出し抜けに犬が用便を始めた。邦彦は思わず舌打ちをした。普段、ここではしないのに今日に限っているのかよ、と邦彦は愚痴をこぼしながらこれを処理せんと歩道に屈み込んだ。そのとき、そうして内心に不平を抱えながらやっているものだからつい手元がⓓ疎かになったのだろう、引き

二〇二四年度　樟蔭高等学校　入学試験　問題用紙　【国語】

二〇二四年二月十日　実施　　解答は解答用紙の所定の欄に記入すること。　〔六枚のうち　その四〕

綱を握る邦彦の手の力がⓔユルんだ。その瞬間、なにを思ったか犬が反対側の歩道の方へ走り出し、邦彦は、あっ、と叫んだがもう遅い。犬はあっという間に反対側の歩道に至り、そして邦彦たちが向かおうとしている方とは反対側の通行量の多い幹線道路の方角に向かって走り始めていた。

瑠佳が悲鳴を上げ、邦彦は大声で犬の名を呼んだ。犬は振り向きもしないで走っていった。そのとき邦彦はなにも考えなかった。祈りもしなかった。瞬間的に、犬の名を呼びながら走っていた。五分後、幹線道路ぞいのドーナツスタンドの看板の脇で匂いを嗅いでいた犬にようやっと追いついた邦彦は引き綱を摑(つか)むと同時にその場に倒れ込み、起き上がらなかった。∨何十年ぶりの、準備運動なしの全力疾走によって心臓が爆発していた。そのとき邦彦は、なるほど、瑠佳が自分から離れるのではなく、自分が死んで瑠佳から離れていくということなのだな、と思っていた。

一週間後の休日の午後。瑠佳が洗濯物を干していると、邦彦がマンション前の歩道を右に曲がってとぼとぼ歩いてくるのが見えた。あの日のことは有耶無耶(うやむや)にしていた。邦彦には、「私、気が動転してよく覚えていない」と言った。自分でも、そんな訳あるかい、と思いつつ。

洗濯物を干し終えた瑠佳はベッドルームに入っていき、普段、使わないものをしまってあるクローゼットの抽斗(ひきだし)を開けて衣服を取り出して広げ、「まだ着られるかしら」と呟いた。瑠佳がかつて使っていたランニングウェアであった。「もしも、着られなかったらまた買いにいけばいいか。二度手間になるけど」と、また独り言を言って瑠佳はウェアをベッドの上に広げておいた。

玄関で犬が吠えた。邦彦が帰ってきた。瑠佳は、成長しなければ、と思いながら、おかえりなさい、と声を掛けて立ち上がった。

⑨ベッドの上のウェアの傍らに、瑠佳のものよりひと回り大きな真新しいウェアが、並んで、あった。

（町田康「ずぶ濡れの邦彦」　一部改）

問一　波線部ⓐ～ⓔの漢字をひらがなに、カタカナを漢字に直せ。

問二　破線部Ⅰ～Ⅴにおいて、用いられている表現技法として適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えよ。

ア　直喩（明喩）法　　イ　隠喩（暗喩）法　　ウ　倒置法　　エ　体言止め　　オ　対句法　　カ　反復法　　キ　反語法

問三　太線部①とあるが、それはなぜか。その理由について、二十字以内で答えよ。

問四　太線部②とあるが、これはどういうことを言っているのか。五十字以内で説明せよ。

問五　太線部③とあるが、それは何を想像して顔をしかめたのか。適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア　いざという時に、走らずに済ませることが出来るか不安に感じたから。

イ　物禿真ノ進が誰か分からず、瑠佳と会話が弾まなかったから。

ウ　喜劇の舞台中継に、瑠佳だけ笑わなかったことが気詰まりだったから。

エ　瑠佳が悪人に誘拐される日が来るかもしれないと心配になったから。

問六　太線部④とあるが、それはどういうことか。適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア　自分を心の底から愛してくれるならば、どんな男性でもよかったということ。

イ　名前に「彦」ではなく「邦」が入るならば、どんな男性でもよかったということ。

ウ　走らない人という前提があれば、どんな男性でもよかったということ。

エ　収入が標準よりかなり高ければ、どんな男性でもよかったということ。

問七　太線部⑤とあるが、何の動機か。十字以内で端的に答えよ。

問八　【　⑥　】に当てはまる語句として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア　いまでもまだ思いがある　　イ　もう一度走ってみたい

ウ　絶対に許してあげない　　エ　いつか復讐してやる

問九　太線部⑦とあるが、なぜここで「親切な」にかぎかっこがついているのか。適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア　その友人が邦彦にとって古くからの大切な親友であることを、ことさらに示しておく必要があったため。

イ　瑠佳と邦彦との関係において、非常に重要なキーワードとなるものであると、読者の注意を引くため。

ウ　友人は「親切」から教えようとしたものだったが、邦彦には余計なことであった事を強調するため。

エ　邦彦が友人からの「親切な」忠告により、瑠佳との関係が平穏に保たれていることを十分にアピールするため。

二〇二四年度　樟蔭高等学校　入学試験　問題用紙　【国語】

二〇二四年二月十日　実施　　解答は解答用紙の所定の欄に記入すること。　〔六枚のうち　その五〕

問十　太線部⑧とあるが、どういう意味か。適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア　邦彦は瑠佳との幸せな結婚生活を送るために、「走らない」という願掛けをしているということ。

イ　邦彦は瑠佳との幸せな結婚生活を送るために、神仏に対して祈りを捧げているということ。

ウ　邦彦は瑠佳の病的な考え方を改めるために、神仏の加護を頼って祈っているということ。

エ　今後の結婚生活で火事や地震が起こったとき、どうか無事でいられるよう願掛けするということ。

問十一　太線部⑨とあるが、この物語はここで終わりである。もしこの後、物語が続くとすると、どのような場面が展開すると想像できるか。四十字以内で答えよ。

二、次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

頼光朝臣の郎等季武（すえたけ）が従者、究竟（くつきょう）の者（卓越した武人）あり。季武は第一の手利きにて（弓の名手で）、さげ針をもはづさず射けるものなりけり。件（例の）の従者、季武にいひけるは、「さげ針（糸でつりさげた針）をば射たまふとも、この男が三段ばかり退きて立ちたらんをば（立っていたとしたら）、Aえ射たまはじ」といひけるを、季武、「やすか（おだやかで）らぬ事いふやつかな（ないことを言うやつだ）」と思ひて、あらがひてけり（反論した）。「もし射はづしぬるものならば、汝（なんじ）がほしく思はんものを所望にしたがひてあたふべし」とさだめて、「おのれはいかに」といへば、「これはB命をまゐらするうへは」といへば、「さいはれたり（それもそうだな）」とて、「さらば」とて、「たて」といへば、この男、いひつるがごとく三段退きて立ちたり。季武、「はづすまじきものを（この程度の的を）はずすはずはないが」言った通りに）。従者一人失ひてんずる事は損なれども、意趣なれば（武士の意地があるから）」と思ひて、よく引きて①はなちたりければ、左の脇のしも五寸（約十五センチ）ばかり退きてはづれにければ、季武負けて、②約束のままに、ⓐやうやうの物どもとらす。いふにしたがひてとりつ（言った通りのものを与えられ受け取った）。その後、「今一度射たまふべし」と③いふ。やすからぬままにまたあらがふ。季武、「④はじめこそ不思議にてはづしたれ、Cこの度はさりとも」と思ひて、しばし（しばらくねらいすまして）引きたもちて、真中（体の中央）にあてて放ちけるに、右の脇のしたをまた五寸ばかり退きて⑤はづれぬ。その時この男、「さればこそ申し候へ（ですから申しあげたでございましょう）、え射たまはじきとは。手利きにておはすれども、心ばせのおくれたまひたるなり（射手としての分別が不足していらっしゃるのです）。人の身ふときといふ定（太いと言っても）、一尺（約三十センチ）には過ぎぬなり。それを真中をさして射たまへり。弦（つるおと）音聞きて、そとそばへをどるに、五寸は退くなり。しかればかくはべるなり（だからこのような結果になるのです）。かやうのものをば、⑥その用意をしてこそ射たまはめ（こうしたことには）」といひければ、季武、理に折れて、いふ事なかりけり。（その通りだと理解して）

『古今著聞集』

問一　傍線部ⓐ「やうやう」を現代仮名遣いに直し、平仮名で答えよ。

問二　二重傍線部A～Cの現代語訳として最も適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えよ。

A　え射たまはじ

ア　射たことはございませんでしょう　　イ　射ることは簡単でございましょう

ウ　射ていただいてもよいでしょうか　　エ　射ることはおできにならないでしょう

B　命をまゐらするうへは

ア　命をお助けいただけるのならば　　イ　命をいただくということで

ウ　命をさし上げるのですから　　エ　命を呼び戻してさしあげます

C　この度はさりとも

ア　今度は決して外すまい　　イ　今度はそううまくいくまい

ウ　今度も外すことはないだろう　　エ　今度も外したらどうしよう

二〇二四年度　樟蔭高等学校　入学試験　問題用紙　【国語】

二〇二四年二月十日　実施　　解答は解答用紙の所定の欄に記入すること。　〔六枚のうち　その六〕

問三　太線部①「はなちたり」、③「いふ」、⑤「はづれぬ」の主語を次の中から選び、それぞれ記号で答えよ。

ア　季武　　イ　従者　　ウ　頼光　　エ　矢　　オ　人の身

問四　太線部②「約束のままに」とあるが、どのような約束をしたのか、約束の内容に当たる部分を本文中から抜き出しはじめと終わりの五文字で答えよ。（句読点等は含まない。）

問五　次の文は、傍線部④「はじめこそ不思議にてはづしたれ」の中に用いられている表記法について説明したものである。文中の空欄に入る語をそれぞれ答えよ。

この部分は「はじめは」とせずに「はじめこそ」とすることで、下の「はづしたれ」までの部分が強調された表現になっており、このような法則を（　Ⅰ　）の法則という。この法則で用いられる語は「こそ」以外に「（　Ⅱ　）」「（　Ⅲ　）」「や」「か」がある。

問六　太線部⑥「その用意をして」とはどういうことか、四十字以内で説明せよ。

問七　この話の内容として正しいものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア　季武は屈強な従者を一人失うのを惜しく思い、わざと矢を外して多くの品物を渡した。
イ　季武の従者は大変な弓の名手であり、糸でつり下げた針に矢を命中させるほどの腕前であった。
ウ　季武は従者と命を懸けて弓の勝負をしたが、わき腹にしか当てられず従者の欲しいものを与えた。
エ　季武は矢を命中させてしまい従者が一人減るのは惜しいと思いつつも、意地を通して本気で射た。
オ　季武は弓の名人でありながら、三段ほど離れると従者の予言通りに右や左に矢を射損じてしまった。

問八　『古今著聞集』と同じ文学形態（ジャンル）の作品を次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア　奥の細道　　イ　宇津保物語　　ウ　今昔物語集　　エ　源氏物語　　オ　古今和歌集

三、次の各問いに答えよ。

問一　例のように、四つの熟語（例＝国歌・校歌・歌声・歌詞）が完成するよう、①～⑤の□に漢字を当てはめよ。

例：国 歌 声　　詞 答 直　　化 読 神
校 誤 夕　　人 本 オ

① 正 □ 散　② 祝 □ 記　③ 実 □ 利　④ 母 □ 頭　⑤ 海 □ 王

問二　次の①～⑤の作家・詩人の代表作が完成するよう、□にあてはまる生き物を次の中から選び、それぞれ記号で答えよ。（ただし同じ記号は二度使えないものとする。）

① 作者：夏目漱石　作品：吾輩（わがはい）は□である　　② 作者：芥川龍之介　作品：□の糸
③ 作者：小林多喜二　作品：□工船　　④ 作者：中原中也　作品：□の歌
⑤ 作者：村上春樹　作品：□をめぐる冒険

ア　鼠（ねずみ）　イ　牛　ウ　馬　エ　羊　オ　猫　カ　山羊（やぎ）　キ　蜘蛛（くも）　ク　蜥蜴（とかげ）　ケ　蟹（かに）　コ　蛇　サ　蝶